

九月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

庭

武田 弘之 神奈川

カブトムシ群れて遊ばん夏近し庭のむくげに花紅く咲く

今朝もまた来遊ぶ鳩よ君生れし藤棚はわが庭に今なし

またも来ん山鳩のため藤棚のなきわが庭に餌を撒きおく

「ぼっこ」とふるさとことば言ふ妻に一瞬呆としたりき人は

「ソフトボール飛んできました？」と来たる児と庭に探して楽しかりにき

スーパードヴァ

清水 正子 神奈川

難読の（アスパラガス竜鬚菜）よ回診の教授のひげはびんと反りぬき

「観賞用だった」は本当？なにゆゑか葉の退化せし（竜鬚菜）は

風車の国オランダ渡りの（竜鬚菜）ベーコン巻きが麦酒には合ふ

美しき風車銀河に出現すメシエの知らぬスーパードヴァが

定家の見しスーパードヴァの残骸ぞへかに星雲は天のオパール

とほき国の地図

後藤 美子 北海道

追はれつつ日々は過ぎゆく返事書かむ友の便りを机上に置きて

ひこばえのリラ幾本を包み込み盛りなり白き芝桜の花

黄砂はこぶ初夏の雨ベランダの手すりにあはき模様を描く

遙かなる砂漠より来てベランダに黄砂は描くとほき国の地図

ドローンで直播にする稲作が普及しゆくか広し北海道

雨はふるふる

斉藤 梢 宮城

鳩笛を吹かなくなりて父はいま木々のそよぎも見ることのなし

転院の母と施設を移る父ふるさとに春の雨はふるふる

心より老いてゆくのか 歩行器の説明を聞く父うはのそら

生きるために母はあちこちに嘘を言ふ それは嘘ゆゑわれは苦しむ

アカシアの甘やかな香に満ちてゐる道をゆけどもふるさと悲し

☆

☆



高野 公彦 千葉

日影 康子 富山

おとなしき草食動物と思ひしが媼笑みつつ大トロを食む
静の聡太、動の翔平それぞれが我らに贈る豊かなるもの
海の字を書きて最後の横線を水平線と言ひし少女よ
戦死者の遺体修復する技師はこの世でいちばん寂しい人か
体内をひたせる水のしづけさのそのひそけさを思ふあかとき

奥村 晃 作* 東京

影山 一男 千葉

「COCCOON」の二十七号の批評会招かれて評を尽くす愉しも
春の日の茅場町なる会議室若き等集う皆マスクして
オンライン参加者含め巨大なる歌会巧みに捌く司会者
縦え一字の字余りであれ表現の弛みとことん正せと述べた
老体のオクムラは長い評会の評を尽くして無事帰宅せり

森重 香代子 山口

桑原 正紀 東京

新刊書購ふこともなく岩波の『図書』が届けば拾ひ読みせり
「表紙絵のことば」を先づは楽しんで月ごとに読む岩波の『図書』
喪の服を久しく纏ふことなきと米寿の近き或る日思へり
びかびかの青虫だつた日のありて目前の蝶をわが愛します
坐りては吟味を重ね選びたる一脚の椅子いまは輩しんがら

今暫しわれに眠りをたまへかし午前五時まへ窓はや明けて
早朝に起床し一合の米を研ぎそれより始まるひと日の生活
在るがまま穏しく涼しく生かし夫想ひ出しつつ寺庭清む
頼まれし随筆ひとつ書き終へてどつと疲るるわれ九十三
切れぎれに目覚めて眠れぬ真夜中の寺の奥処の窓の半月
真夏日のつづく五月に狂ひ咲く花はなけれど阪神強し
甘酸ゆき桜桃三つ四つ五つ食みて「父の日」しづかに過ぎぬ
CDもレコードもなき令和の世ソノシートなどまして知らずも
あぢさゐの花毬ゆうらり膨らみて新型コロナまだ終らない
ランドマーク二つ失せたる神保町過去と未来の狭間を歩む
グーグルレンズで花の名知れど五六分歩いた頃にもう忘れをり
安直に知り得たことはすぐ忘るへうん、知った鳩の巢の類にて
スマホへの依存度増してゆく自覚あればアプリのいくつかを消す
何万冊もの図鑑、辞書類もち歩くやうなスマホに狎なれまいぞゆめ
多く知り多く忘れて多く会ひ多く別るる倍速時代



狩野 一男 東京

あぢさゐが咲けば思ふよどうなるか「あじさいまつり短歌大会」
三鷹台駅前整備工事長々しやがてバスタにしたいやうだが
ダイエツト、美容整形などでなくコロナをめぐるビフォー・アフター
「ウィズ」から漸く「アフター」へ転換とよろこびたれば第九波とぞ
六回目ワクチン予約出来ぬのはあの出来事が激化するため

宮里 信輝 神奈川

ダムに来て何回見ても飽きません水が真下に落下するさま
轟音の白き噴流 発電機を回し発電して来た水は
宮ヶ瀬ダム展望塔より望むなり「横浜」、さらに「東京」の景
どのやうな思ひなるらむ満タンの水を堰きゐる宮ヶ瀬ダムよ
無言にて落ちゆくならず叫び声あげて水らも落ちてゆくなり

小島 ゆかり 東京

アカシアの花散る日なりアメリカの核のボタンが広島に來ぬ
のりだしてかたつむりの身滴れり青い雨中のあぢさゐのうへ
星空のワンピース着て会ひにゆく生まれるまへに死んだあの子に
とこころより雨の予報のところつてどこだジャージャー茄子炒めをり
Vision Pro 使ひなせばもしかしてこの世をうまく生きられますか

木畑 紀子 京都

お向かひの軒をせはしく出入りするつばめ見飽かず巢があるらしい
ジュルジュルと巢に湧く声がきのふよりけふは大きい何羽あるやら
お向かひの玄関、うちの窓の間をさなつばめが往復しはじむ
柔毛まだ抜けぬ子つばめ電線で親を待ちをりわれも待ちをり
ホバリングにて子つばめに餌をあたへまた翔りゆく親つばめはも

島田 暉 神奈川

カーテンが夏風を受けふくらめば帆船となるせまき書齋は
随筆を書きつつ改行おこなへば水面に白鳥飛び立たせたり
公園の木陰の椅子にいこふなり緑の言葉風にささやく
老いといふやさしき靄に甘えるな真赤き薔薇にねむれる夢を
ほら君が死んでほるない唇動き君の言葉の桃が薫れる

大松 達知* 東京

若さから遠くはなれてわがうちに若かりし日は門のごとくあり
妻子あつてここになかなか来られぬをしあわせとしてこの牛モツ
問題用紙ひければそこは駅のごとし 1 次の極限を求めよ とある
ああそこにあつたと思ふああそこはあのマンシヨンのあの棚の下
金食い虫ッ！ 母にたびたび言われたりきほんとうにそうで、そうだったけれど

田宮 朋子 新潟

二十年あまりつかひし木の卓が塗り直されてよみがへりたり
前世紀いづこの森で呼吸せし木かテーブルとなりてひさしき
一日中坐りつづけて疲れざる回転椅子がわが居場所なり
パソコンを辞書を紙片を筆記具をしまへば広き食卓となる
卓上のいちりんざしの蛍袋うつむきをらむ夜ふけの闇に

津金規雄 神奈川

〔眠狂四郎〕第一作の「殺法帖」に青春の香ありいたく身に沁む雨の日はころあらふわだかまるもの晴れてゆくこの不可思議さ寄り集ふといふこと美しく見せて咲くしやくやくの花いま盛りなり充分に生きた気がするタワマンの建つ水の辺に月の出を待つ雷蔵と同年の母若き日に子を連れ親しは〔眠狂四郎〕

小山 富紀子 京都

落つるのか落とさるるのかいま赤き椿がひとつ枝を離れぬうつむきに落ちし椿はもう天を仰ぐことなく地へもどりゆく痛みなどないのだからうか梢より椿ほとりと落ちしそのとき琉球の古城にありと伝へ聞く明けに音立て散る一夜花ひとよばなひと夜でも見るべきものは見て散ると一夜かぎりの白いさぎよし

小嶋 一郎 佐賀

古い妻と蜂蜜舐むるなどけふの愉楽を神も知ることならずこの重き梅雨の空をば支へる泰山木よ花のしろたへわれに来て纏はりをりし蚊なるべし厨の妻が二度ほど叩く声変はりせし隣り家の中三にさしたる用は無けれど声掛く南部より北部の梅雨入り先に来て九州地図を逆さに見入る

福士りか 青森

二巡目の暦めぐりてはや二年朝のトマトの赤みづみづし朝いちばん届くメールはドコモから誕生ケーキのスタンブ添へてやはらかな猫パンチ受け目覚めたりもうすぐ夜が明ける時間ためづらしくツンデレ猫が鼻突きをして甘えくるわが誕生日赤ワイン一本冷えてゐるけふはサクサク終はる掃除・洗濯

藤野 早苗 福岡

リクルートスーツなき頃わたくしが二十二歳の夏の就活男女雇用機会均等法制定その年に就職したりわたくし総合職一期生なる女性らの今ごろどうしてゐるのだからうかひとつづつ手放し自分を生きられる今猛烈に仕事かしたい六十年生きてやうやく人並のおくて晩稲にも程があるぞわたくし

風間 博夫 千葉

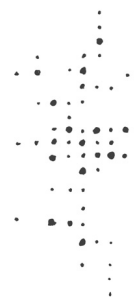
部屋隅のちやぶ台出して食事する食事後はちやぶ台かたづけてゐた四人掛けの長方形の机ひとつ出しつばなしの食卓であるパソコンを一台置けば食卓はわれ専用の書斎となりぬ妻を頼り不安なく生きてきたるわれこれからも妻を頼りて生きむ〔同体〕と見なされてしまひ取り直したり○●の星しかなくて

田中 愛子 埼玉

寒くなく暑くもなくエレベーター前にて交はずあいさつに迷ふ五人のうち四人が未だマイナンバーカードを持たずわが歌仲間〔ひも付け〕を怪しみ友はだれかが推し勧めあるカード作らず主義でなくただめんどうでマイナンバーカード作らぬことは秘めおく一周忌過ぎ読み返しぬわれの名を詠みてくれたる杜沢氏のうた

橘 芳 園 新潟

コロナ禍の三年前にまたと言ひ手を上げし君見たるが最後に三万株菖蒲の咲くと報じらる今年君のゐない五十公野いぢみの河治冬樹、岡崎康行よき友はよき名を持ちてよき歌詠みき妻の出の寺に墓置くクリスチャンの友の冬樹はおうやうなりき歌会の席空け浄土で待つ友を思へばなんで死が寂しからう



水上 芙季 神奈川

0120.0130...メモ帳のアプリ開けば残りをり前駆陣痛の時間の記録
おひな巻きされたる赤児を抱つこせりどこより来しやどこへ行かむや
産院にて王政復古の大号令思ひて子宮復古を待てり

「おかあさん、来るよ」と母は娘われをお母さんと言ふ泣き出すわが児に
明日へと漕ぎ進めゆく櫂の音かすかにさせて赤児の寢息

水上 比呂美 東京

大野 英子 福岡

赤ん坊の第一声こそ聞きたけれ見舞ひ叶はぬコロナ禍四年目
五月朝カエサルと同じ手術法でとり出されをりむすめの赤子
豊葦原瑞穂の国の相模なるむすめ夫婦に子が産まれたり
人類は哺乳類だとガチおもふ横たはる子が子に乳をやる
そのかみの皆神山の神主の先祖と芙季の子がつながりぬ

水平に見えてた空が見上げねば見えなくなつてゆくよわが街
真夜中も車行き交ひ雨でさへしづかに降るを許されぬ街
真夜中を音、ひとのこゑ途絶えない街をわたしは嫌ひではなく
みづたまりに水輪つぎつぎ広がりぬ止むことのなき祝祭めきて
雨のなかを餌やる人に群がりて鴉はほんに濡羽色なる

鈴木 竹志 愛知

松尾 祥子 東京

『宮柁二青春日記』を辿りつつ「新美さん」とふ記述を見つく
南吉は一歳年は下なれど柁二にとりて良き友なりき
南吉が柁二と語る日々ありしを今に知りてぞ嬉しかりける
南吉はその後教師となりたれど病に倒れ戦後に生きえず
その後の柁二は召集されたれば一兵卒として中国の地に

梅ジャムを煮つめる香り部屋に満ち母に優しくなれさうな午後
ほほゑめばほほゑみかへすをみなあり三面鏡の三面のなか
姉の留守に「しこちゃん」の世話頼まれぬすなはち獅子唐に水を遣ること
七キロの赤子を風呂に入れる日々腰痛けれど活力の湧く
駄々こねる子の論理もて核兵器使用示唆せり狂王腐狎

原賀 瓊子 東京

鈴木 千登世 山口

『デルボーの人』のその句を読みたくて、そのために句集一冊を買ふ
くつきりと水面にひらく睡蓮に大気を弾きたしかさのあり
八つどきに閉ぢはじめたる睡蓮よ閉ぢますランプの紡錘形に
新ジャガを焼いて皮ごと食べるとき平常心を取りもどして
黒衣あり白衣あれどもけふ知りぬサマルカンドはブルーが喪服

ゆらぎつつ点滴に行く夫の背見送りて待つ百五十分
舟を漕ぐやうな歩みを告げずをり言葉にすれば定まりさうで
リノリウムの床新しき院内を影持たず行く医師も患者も
カフェラテをわたしたしのために淹れくるる無口な友に似たる自販機
(土、ノ、ヒ)とひとつ漢字を解きたり言霊がつと目覚めぬやうに

小島なお* 東京

小田部 雅子 静岡

服を脱ぐように鞆を外しゆく君は摂食障害を言う

食べないとはじめに声が出なくなる阿佐ヶ谷の夜を磨く雑踏
才能の話は横に置いて、置いたまま揺れる吊り革の円

フランス語の冠詞を見ればわかるよと le chateau は城 la maison は家
お菓子しか今は食べられない君の手の窪に嵌め込むマドレーヌ

お尻から素敵な匂ひしてきたらいただきもののメロン食べごろ
お尻嗅ぎはかるメロンの熟れぐあひ 子のお尻嗅ぐ母猫マリィ
雨降れば限度を知らず吸ひあげて割れてしまひぬ真面目なトマト
戦闘機、迎撃ミサイル増やしつづ兵がどんどん辞めてゆく鳥
「癒され」たり「元気をもらおう」のが好きなわれらが非戦をつらぬけるものか

詩歌句レクソン ● 小島ゆかり

客観的まなざしで 《新聞転載》

歌を作り推敲するとき、表現の細かいところを直したり、工夫したりするので、案外忘れてしまうことがあります。それは、「自分を知らない人が読んだとき、どんなふうに伝わるだろうか」と、少し距離を置いてみる（客観的なまなざし）です。

たとえば、先日わたしの短歌教室でこんな歌が話題になりました。

あなたとの出会いは偶然でもそれがわたしの一生の光となりぬ

なかなかすてきな、愛の歌です。みなさんは、この歌をどんなふうに想像しますか。
①ふとした出会いから、最愛の人にめぐり

会えたよろこびの歌。作者は若い女性。

②年齢を重ねた夫婦の、思いやりと愛情の歌。作者は男性でも女性でもよい。

③長年の友情にしみじみと感謝する友人への歌。歌の口調から女性の作者らしい。ほほ、こんな感じではないでしょうか。

①から③のどの場合でも、この歌は納得できます。

しかしじつさいの作者は、七十代後半の男性。長く奥さんを介護している方です。すると、少し考えてしまいますね。

夫婦としての歳月に加え、妻を介護する日々を背景として、作者はこの深く尊い愛情に到達したのです。その大事なところが、このままで伝わるかどうか。残念ながら、

原作の表現ではそこまでは読み取れません。こんなにすばらしい内容なのに、じつにもつたいたいと思います。

そこで、次のような推敲のアイデアを出しました。

介護して妻と在る日々 偶然の出会い
一生の光となりぬ

作者は奥さんの介護をしている男性である、という情報によりおのずから、この歌の奥にある苦さや寂しさをも読者に伝えることができるのではないのでしょうか。そしてそれが、この一首を生かす重要なポイントなのです。

自分の歌を（客観的なまなざし）で見ることを、忘れないでください。